

## 論文内容の要旨

研究科名	人間社会学研究科	専攻名	地域マネジメント専攻
学籍番号	1813D02	氏名	NIU MENGCHEN
論文題目	中国における大学附属博物館の研究 －日本の大学附属博物館と比較して－		
要 旨			
<p>1. 研究の背景</p> <p>中国における大学附属博物館の設立は、欧米の先進国に比べて発端が遅く、近年、国家の関連政策の助力を受けて、ようやくその発展の端緒が現れた。「博物館头条」などの専門コンサルタント会社の統計によると、中国の大学附属博物館の総数は、現在 450 ヶ所を超えており、まさに高速ともいえる発展途上にある。</p> <p>大学附属博物館は、大学が有する文化部門の重要な一部であり、大学の文化部門の情報発信や人材育成に重要な役割を果たしている。特に博物館学専門の学生に対する技術的及び専門知識の涵養、博物館人としての使命意識の形成には大きな意義を有しており、社会の発展にも重要な推進作用がある。しかし、現代社会における中国の大学附属博物館の発展は、運営・管理・倫理・業務実践など多方面の問題が存在している。本研究は、多文化を背景とした大学附属博物館の運営の最適化、公共倫理、業務の強化を再考し、大学附属博物館の質の高い発展に寄与することを目的としている。</p> <p>大学附属博物館は、大学に所属し一般公衆に公開されている博物館であり、大学の運営事業の重要な構成部分である。他の公共博物館と比べて、大学附属博物館は学術研究の面での優位性があり、その展覧会は先端性、学術性、実験性などを特徴としており、公共博物館の展覧会とは異なる特質を有している。大学附属博物館は、学生と直面し、教育の使命を担い、社会の価値観の形成に影響を与えている。時代の命題を解き明かすには、大学附属博物館の発展は欠かせない。本研究により、地域社会における大学附属博物館の役割を明確にするものである。</p> <p>2. 研究の目的</p> <p>大学附属博物館の資料は、大学の発展過程の中で徐々に蓄積されてきたもので、その資料は間接的に、または直接的に大学の精神や文化を体現している。大学附属博物館の趣旨、使命、運営理念、業務実践はすべてその背後に大学の創設者や、大学を代表する著名な研究者の思想を表している。</p> <p>大学附属博物館は、大学の学術研究に対して実物資料の提供で支援することができ、大学教育と学術研究のレベルを反映している。人材育成の面では、一部の大学附属博物館が大学院生やポストドクターを採用し、未来の博物館研究者や業務実施者を育成するなど人材育成の役割も果たしている。</p> <p>大学の機能は、人類の知恵を伝承し、現存する知識を拡充し、社会に貢献することにある。しかし最も重要なのは、健康を維持する環境を提供し、学生の全面的な発展を促進することである。大学附属博物館は、大学の文化と歴史を伝承し、大学の運営理念と教育目標を反映する重要な媒体である。大学附属博物館が伝える価値観は、大学の伝統文化と歴史の情報発信を担い、さらに人材育成に寄与し、最終的には中国社会に影響を与えることである。</p> <p>社会の発展に伴い、大学附属博物館は大学の文化を伝承し、大学の歴史を保存継承すると同時に、館外の文化遺産の保護と伝承の重責を担っている。大学附属博物館は、他の公共博物館と比べて、専門性の高い資源や人材に恵まれている。</p> <p>近年、大学附属博物館から一般公衆に与える影響が高まるにつれて、公共教育が大学附属博物館の重要な役割となっている。大学附属博物館の公衆教育は、家庭教育と学校教育の有益な補足であり、公民</p>			

人格の形成を推進し、さらに安定した社会の構築を後押ししている。

一方で、大学附属博物館は、ほかの公共博物館よりも運営管理面の問題が際立っており、資金の逼迫、管理側との仕組みの不備、館長の兼務事務の負担、公共サービスに対する限界などが挙げられる。同時に、大学附属博物館の公共性の問題は常に検討されており、専門性の壁と一般公開の必要性は大きな課題となっている。業務実践の面では、大学附属博物館のデジタル資源開発、博物館学の専門研究、館内人材の発展にも多くの問題が存在している。

大学附属博物館は博物館体系の重要な構成部分であり、専門学科の教育と学術研究を補助する重要な役割を果たしているだけでなく、自らの優位性を積極的に利用し、大学の伝統と歴史を継承し、それらを伝える機能を担っている。

中国の改革開放以来、大学附属博物館は数、種類、建築、資料、展示などの面で顕著な変化があり、特に近年では急速な発展傾向を示している。また、大学附属博物館は大学の伝統文化を築く点においても重視され、校内の風景展示、イメージ宣伝の場になっている。大学附属博物館の発展過程において、教育部は『国家文物局、教育部の大学附属博物館の建設と発展の強化に関する通知』、『教育部弁公庁の大学附属博物館の管理業務の強化に関する意見』など、大学附属博物館の建設と管理に関する関連政策を公布し、大学附属博物館の発展に対して重要な指示を出した。

中国における大学附属博物館の急速な発展に伴い、学術界ではその発展状況と問題に対する研究は、若干であるが確認できる。しかし、大学附属博物館の発展について、法令及び大学附属博物館の歴史的視座から史料を整理し、時代背景と結びつけてその発展状態と特徴を分析した研究は少ない。本研究は関連文献の分析、関連ウェブサイト、新聞雑誌などの情報の収集と整理に基づいて、中国における大学附属博物館の発展段階を分析・整理し、各段階の発展特徴や歴史経験、規律を総括し、大学附属博物館の健全な発展に寄与することを目的とするものである。

中国の大学附属博物館を対象に研究を展開する主な意義は、以下の二点に集約できる。

#### (1) 理論的意義

系統的な研究を通じて、大学附属博物館の発展過程に対する多角的、系統的な認識を形成し、中国における大学附属博物館研究を深化させ、21世紀の中国一流大学建設における大学附属博物館の方向性を見出す。

#### (2) 実践的意義

多角度な分析を通じて、大学附属博物館の発展状況と特徴を把握し、大学附属博物館の未来の発展に寄与するデータを提供する。

前述の如く、現代社会における大学附属博物館の発展速度が非常に速いことが特徴である。まず、大学附属博物館の設立数の増加スピードは、毎年平均で約13の大学附属博物館が新たに増えている。次いで、建物の規模の増大である。大学附属博物館の規模の拡大ペースが加速し、以前は平均数千平方メートルの規模が一般的であったが、平均で数万平方メートルの大型博物館に発展しているのが特徴である。大学附属博物館の多くは開館前から複数のルートから所蔵品を収集しており、その数は大幅に増加し、数十万点を有している。このような大学附属博物館の規模の拡大は、大量のコレクションを蓄積するための場所を提供し、大量のコレクションによる展覧会を開催し、研究を行うための資源を提供している。さらに、大学附属博物館の技術的な進歩が速いのも特徴である。大学附属博物館は、展示の中にVR技術を利用した没入型デジタル化を採用し、技術的手段を多用した展示やインタラクティブを行っている。これにより、大学附属博物館の見学方法と見学体験は大幅に豊かになったのである。

### 3. 研究の方法

本研究の方法は、文献渉猟、文献の分類比較、現地調査を基本に進めることとする。それらの情報分析を通して、収集した情報を分析し、関連文献を比較分類し、結論を導き出す。

また、中国の大学博物館研究を進める上で、他国の大学附属博物館と比較し、特徴を明らかにする。世界の大学博物館の歴史や発展過程を追究し、その変遷や影響を分析し、中国の発展動向を予測する。

博物館コレクションに注目し、資料の歴史や展示方法について考究し、大学附属博物館の管理、運営の一例として列挙する。大学附属博物館の展示や教育プログラムの効果評価を行い、改善すべき方面を見出す。

以上の方法を総合に活用しながら、中国の大学附属博物館の研究を進めることで、未だ発展途上にある大学附属博物館の研究に一石を投じるものと予測される。

#### 4. 研究の結果

本論文には、研究を通して中国大学附属博物館の歴史や現状、そして実例について論じてきた。博物館の概念とその定義に関する内容を含め、国際博物館会議 (ICOM) 規約および日本の「博物館法」に基づいて博物館の定義を解説した。そして、博物館の定義に関する歴史的な変遷と拡大を明らかにし、中国における大学附属博物館の歴史、発展と変化、現在のあり方などについて論述した。

第 1 章「中華人民共和国憲法と博物館条例等に見る中国博物館の定義」では、第 1 節「中華人民共和国憲法での博物館の諸相」、第 2 節「中国の一般法律に認められる博物館関係条文」、第 3 節「中国『博物館条例』」、第 4 節「政府会計準則第 11 号 文化財資源 (意見募集稿)」の 4 節から構成し、憲法・法・条例・準則等から中国の博物館の定義を求めた。

第 2 章は、「用語定義と研究目的と問題の所在」と題し、第 1 節「用語『博物館』『博物院』の定義」、第 2 節「用語『附属』『付属』の字義」、第 3 節「用語『大学附属博物館』の定義から構成した。第 3 節「用語『大学附属博物館』の定義」では、大学附属博物館では、1543・1544 年にイタリアで最古の大学の一つであるピサ大学に併設されたヨーロッパ最古の学術植物園であるピサ大学附属植物園とオックスフォード大学の附属機関として 1683 年に設立され現存するアシュモレアン博物館 (Ashmolean Museum) を確認した。

第 3 章「中国・日本の大学附属博物館に関する研究史」では、先ず、第 1 節「中国博物館学の研究史」では、従来の研究成果に基づく中国博物館学史の 5 期の分類を踏襲し、近代博物館の概念を中国への伝播過程とその影響を研究した。第 2 節「清朝末期における日本博物館の摂取」では、李圭に拠る『環遊地球新録』(1876 年刊行) 第 4 巻「東行日記」から、黄遵憲では『日本雑事誌・其五十一』(1879 年刊行) を、王韜『扶桑遊記』などから 19 世紀後半における日本からの博物館思潮の受容を確認した。第 3 節「清朝末期における中国博物館の歴史」では、清朝末期の 1840 年頃中国の西洋化が開始されるなかで、その影響の一つとして中国の博物館事業が開始された。第 4 節、「民国期 (1912~49) の 5 冊本にみる大学附属博物館」では、中国博物館学研究の萌芽期である 1930~1940 年代に出版された博物館学研究書籍は、次の点で共通している所があった。第 5 節、中国の大学附属博物館に関する研究略史では、中国の大学附属博物館に関する研究は、民国時代の舶載情報の移入を受け継ぎ、中華人民共和国時代に入ってから社会の民主化の中で大きな発展を迎えた。

第 4 章「日本の大学附属博物館研究の歴史と現状」は、5 節の論述を通して、下記の結論を得た。日本の大学附属博物館の濫觴は、現在の東京大学工学部の前身で、1871 年に工部省に設置された工部大学校に関する書類の中の記載に、「博物場」という用語での大学附属博物館と推定される施設が確認されるのが現時点では最古と考えられる。大学附属博物館の必要論の先駆けとなったのは、上記の工部大学校の博物場から遅れること約 40 年後の 1912 年に鵬心生 (本名、黒田鵬心) による讀賣新聞の記事が濫觴であった。1996 年に、文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会は、「ユニバーシティ・ミュージアム設置について」と題した中間報告を公表した。当該報告は、政府の施策では初めて大学附属博物館に関する点が大きな特徴であり、その結果日本での大学附属博物館の研究と大学附属博物館の設立は加速された。一方、2005 年頃、従来の学校附属博物館論は、大学附属博物館に限定された傾向がある中で、「ミュージアムパーク茨城県立自然史博物館」は、小学校を対象とした教育活動の一環とした学校附属博物館構想とその実践を行った点が特徴であったことを考究した。

第 5 章「中国大学附属博物館の歴史」は、第 1 節「維新派の康有為と「天民」に拠る学校博物館設置論」で、清朝末期の変法自強を提唱した代表人物である康有為と、匿名であるが博物館設立の重要性を

強調した「天民」の観点をまとめた。第 2 節「1842 年～1900 年にかけて、中国で開館が計画された博物館」では、1842 年から 1900 年までの間、中国で開館を計画していたが実際に開館を実現できなかった 4 つの博物館計画をまとめた。以上の博物館や展示施設は開館は実現しなかったものの、現存している記録から分析すれば、すでに綿密な計画が作成され、清朝末期中国人の博物館建設思考を忠実に体現したものといえる。第 3 節「中国大学附属博物館の歴史的経緯」では、現存している 393 館の中国大学附属博物館を列挙し、それぞれの分類、開館年、地域などをまとめた。

第 6 章「中国における医薬系大学附属博物館の歴史」は、医薬系大学附属博物館の特徴を紹介した。博物館としての基本的機能である収集、保存、教育、研究機能を明確にする上で、医学博物館独自の特性を生かし、時代の発展との協調を目指すことが必要である。また、大学附属博物館の特徴を利用し、医薬と大学両方の長所の融合を目標にすべきである。医薬系大学附属博物館は、医薬の歴史コレクションを収集すると同時に、現在の医学の発展状況や、未来の予測などにも注目し、公衆に向けた教育活動を通して、博物館の役割を果たすことが重要であると筆者は考えている。

第 7 章「中国の典型的な大学博物館－京師同文館の歴史－」は、京師同文館の建設と発展を紹介した。京師同文館博物館は、社会が激動する環境の中で誕生し、洋務運動と中国現代化の重要な成果になった。このような産物は、中国人が近代で世界の発展に注目し、中国社会の発展を推進しようとする証拠である。しかし、同文館博物館に関する資料はまだ有限であり、その歴史に関する考査はまだ不足であるのは事実である。現存している有限な資料を通じて、京師同文館博物館の存在と教育施設の補助としての意義を判明することは、中国博物館史の重要な一部として、承認されるべきだことを論じた。

第 8 章「上海大学の歴史と銭偉長記念館・海派文化展示館・校史展示館など」では、筆者が主に実務経験を構築している実践の場、上海大学博物館を例に、中国の大学附属博物館の日常運営を詳細に説明し、経験をまとめた。上海大学は中国の博物館学教育の重要な発信地であり、数十年にわたり模索と実践を続け、中国の博物館学教育の発展に重要な貢献をしてきた。未来の上海大学は引き続き博物館学教育の発展と整備に力を入れ、中国と全世界の博物館事業のためにより多くの優秀な人材を育成していく必要性を述べた。

第 9 章「中国大学附属博物館の観光に果たす役割」第 1 節では、中国の観光産業の発展において、人材育成や教育研究が直面している問題や課題を中心に論じた。中国の大学は観光学科教育の面ですでに総合研究、方法研究と特定研究などの多くのテーマを形成しつつあるが、教育内容が萎縮し、理論が重視され、実践が軽視されるなどの問題が依然として存在している。第 2 節では、中国教育部は各大学の観光学科の総合的な研究能力、教育活動や学術的影響力などの総合的な評価に基づき、学科の競争力上位 12 大学を選出した。これらの大学は観光学科の分野で優れた活躍を見せているだけでなく、観光人材の育成や学術研究にも積極的に貢献している。第 3 節では、主に中国の大学観光活動の発展過程、現状、影響及び未来の趨勢を紹介した。1990 年代から、中国の大学観光活動が徐々に盛んになり、市民生活レベルの向上と観光業発展の重要な構成部分となっている。第 4 節では、厦門大学人類博物館、北京大学セクラー考古・芸術博物館、香港中文大学文物館、蘭州交通大学地震博物館の 4 つの博物館の概要を紹介した。

第 10 章「上海大学博物館の国際交流事業」は、国際交流事業における上海大学博物館の歴史と実践を中心に紹介し、特に日本の波佐見町との交流活動に注目し、上海大学と長崎国際大学が 2016 年から行っている博物館学短期研修プログラムについて紹介した。2016 年から毎年約 15 人の上海大学の学生が 3 週間にわたって研修プログラムに参加し、博物館学や茶道文化などの日本文化を学ぶ授業や、波佐見を見学して陶器作り体験を行い、多面的な角度から陶器に関する知識を学んでいる。第 3 節では、主に波佐見町での研修の特徴と意義をまとめた。第 4 節では、長崎国際大学における博物学研修の特色として、学習と実践の融合、包括的な教育施設の提供、博物学に対する学生の興味と専門知識の育成などを紹介している。また、研修には教職員による日本語の通訳もあり、学生が日本文化をよりよく理解し、適応できるよう支援している。第 5 節では、2018 年 12 月、上海大学博物館が 2019 年度の UMAC AWARD

選考への参加を提案し、2019年5月にUMAC AWARD 2019のトップノミネートの一つとなり、世界的に表彰された経緯を紹介した。

第11章「大学附属博物館と地域マネジメント」は、第1節「大学附属博物館の特質と意義目的」で、他の公共博物館や民営博物館と比較して、大学附属博物館の収蔵資料は数量と学術面での卓越性を有した資料群である。第2節「大学附属博物館と地域社会ー地域の文化の核としての大学附属博物館ー」では、大学所在地は、大学が存立していることから、大学を取り巻く地域社会が発生している事例は、当該大学の設立が古ければ古いほど、さらに大学の規模が大きければ大きいほど広範囲となる傾向は強まる。第3節「観光拠点としての大学附属博物館」では、大学附属博物館は各学部・学科・各専攻に基づく複数の大学附属博物館が生涯学習としての観光を抑揚させるためには必要であると考えた。複数博物館に及ぶことは、それぞれの附属博物館の専門性が比較強調されることと、専門性により見る者にとっても「驚きと発見」といった知的欲求の充足が高まるものと考えたのである。

以上の研究結果を踏まえて、今後の研究の方向性を以下に示すものとする。

#### 1.博物館の定義の見直し

本論では、中国や日本の博物館関連規約や法律の変遷をまとめたものの、現在の国際的な規約や慣行に基づいた最新の博物館の定義についての研究はまだ不十分である。特に、情報技術の進展により、展示室以外のデジタルスペースでの展示や学習が増えており、現代博物館の現状を反映した定義の改定が求められる。

#### 2.文化の多様性に対する取り組み

博物館は異なる文化や民族の遺産を保存し、展示する役割を果たしている。今後の研究では、文化の多様性を尊重しながら、博物館の定義や運営においてどのように異なる文化価値や視点を統合するかについての取り組みが重要となる。

#### 3.持続可能性と社会的責任

近年、博物館は持続可能性や社会的責任の観点からの取り組みが求められている。例えば、エネルギー効率の向上、環境保護、共同参画の促進などが挙げられる。今後の研究では、博物館の定義に持続可能性と社会的責任の要素をいかに取り入れるかの討論が必要である。

#### 4. 技術とデジタルの活用

デジタル技術の発展により、博物館はオンライン展示やインタラクティブ体験を提供することが可能になっている。今後は、新たな技術の活用やデジタル化の進展がもたらす博物館の変化についての調査や評価が求められると推測できる。

#### 5. 中国の大学附属博物館に対する継続的な研究の必要性

本論は、中国の大学附属博物館における歴史、発展経緯、現状などについて論述したが、特に中国の大学附属博物館の教育活動、そして近年の発展方向や特徴、代表的な博物館の事例や管理者インタビューなどはまだ不十分である。

以上の課題について、今後の研究に反映させていく所存である。